



砂漠の秘宝に
魅せられて

藤村 裕香

illustration

みささぎ 楓李

砂漠の秘宝に魅せられて

《立読み版》

藤村 裕香

イラスト みささぎ 楓李

日本とは違い、日ざしがとても眩まぶしくてめまいがした。

色白でさらりとした黒髪、細面で奥二重の控えめな顔立ちは、濃い顔立ちが多いこの国ではかなり目だっている。

昼日中の街は、人通りが少なく閑散としていた。

サングラスと日焼け止めが必須だという、ガイドブックの注意書きは間違いないようだ。

永田未来ながたみくは眼鏡を外し、サングラスにかけ替える。

だが、未来は砂漠ばかりのこの国に、観光に来たわけではない。

駆け出しの鉱石研究者の未来は、地上で見つかることはまれな宝石の研究をするために、この国にやってきたのだ。

数億年前にこの土地に、巨大ないん石が落ちて一瞬のうちに砂漠になったことは有名だ。

その影響で、恐竜が絶滅したとも伝えられている。

その時のいん石の熱で化学変化を起し、地球上ではまれな宝石が砂漠にできたというのだ。

その宝石は古代の王の棺かひこに納められたり、まわりまわって王冠の宝石として今も王や王妃の王冠に

飾られているものもある。

どのような経緯でその宝石ができたのか、詳しく研究するのが未来の目的だ。

だが、宇宙からの恩恵を受け幸運をもたらすという宝石は高価で、また多く出回っているものではないので、現物を手に入れると共に、どういう状況でその宝石ができたのかということを確認する為はこの国にやってきたのだった。

だが、肝心の宝石がある砂漠に入るには、まず国王の許可が必要だった。

さらに巨大なイン石が落ちた為、広範囲が砂漠化していて、普通の装備では容易に宝石がある場所までたどり着くことができないので、案内人を雇う必要がある。

案内人は国王の許可がなければ雇えない仕組みになっていたが、人がめつたに入らない砂漠のため、案内人の数も少ないようだ。

不安材料だらけだが、教授の制止を振りきってきたので、必ず結果を持って帰るしかない。

国王に砂漠に入る許可をもらわなければと、未来はまず日本の領事館に行つて口添えを頼んだ。国王の名前で許可証が出るのだと思っていたが、直接国王に会つて許可を得なければいけないようだ。

国王に会うとなると、その前にこちらの身元の調査もされるだろうし、考えていたより時間がかかり

そうである。

案の定、そのまま一週間なんの音さたもなかった。

日本の領事館に早くしてくれるように何度か催促してみたが、そう簡単に許可はもらえそうにない。教授から聞いてはいたが、こちらではなにもかもがのんびりしていて、手続き一つをするにもやたらと時間がかかる。

許可が下りないことには案内人を頼むこともできないので、未来は焦りを感じていた。

暇なので街中を歩き回ってみたが、日中は暑いので人もほとんど歩いていない。

この時期の砂漠の様子や、どの案内人が砂漠に詳しいのかなどのロコミを期待したが、人がいないのではどうにもならない。

あまりの暑さにロコミ情報を集めることを断念して、ほとんどの時間をホテルの部屋で過ごし、筋肉トレーニングをしながらインターネットで情報を集めていた。

研究者としてはかなり珍しく、未来は運動することが好きである。

いいかげんそんな日々にも飽き始めてきた頃、やっと国王に会えることになった。

領事館員に言わせると、普通では考えられない異例の早さらしいが、それでも半月ほど待たされたの

である。

これでやっと準備ができると、未来は暑い中スーツを着こんで喜びいさんで王宮に出かけた。王宮は頑丈な塀に囲まれていて、門の入口には銃を持った警備の人間がたくさんいる。

日本ではあまり見かけない光景に、怖じ気づきながら未来は大使館で渡された書類とパスポートを見せた。

危険物を持っていないか厳しいチェックを受けてから、門を抜けて曲がりくねった長い回廊を進んで広い庭を通り抜けると、やっと王宮の入口にたどり着く。

振り返っても、もうチェックを受けた門は見えなかった。

未来がノックをする間もなく、内側からドアが開いて使用人と思われる人物が出てきた。

「書類を見せてください」

男性は、未来に告げる。

「はい」

未来は再び、書類をその男性に渡す。

「永田未来様。鉱石の研究のため、砂漠の滞在許可を申請にきた方ですね」

男性は、内容を未来に確認する。

「はい。よろしくお願ひします」

やっとここまでできたかと思いつつ、未来は返事をした。

「中にお入りください」

男性は未来に書類を返すと、部屋の中に案内する。

「おおっ」

中に入って、未来は思ほど天井てんじょうが高く、色とりどりのタイルで飾られキラキラと輝いている。芸術的な幾何学模様が、とても美しい。

使用人の後について進むと、廊下の壁には一族の肖像画が延々と飾られている。

まるで違う世界に迷いこんでしまったようだ、未来は思う。

「では、中でお待ちください」

使用人は一つの扉の前で止まり、未来に中に入るように促した。

「はい」

未来は使用人に軽く頭を下げると、ノックをしてドアを開ける。

大学の会議室と同じぐらいの大きな部屋に、赤を基調とした派手な模様の絨緞じゅうたんが敷きつめられ、金で縁どりをされた豪華なソファが壁一面に並んでいた。

低めの天井からはいくつもの豪華なシャンデリアが下がり、壁には狩りの道具や武具、金の装飾品などが飾られている。

ソファには、いろいろな国の人が座っていた。

どうやら、砂漠に入る許可を得にきたのは自分だけではないようである。

未来は周りを見回して、同業者だと思われる欧米人の隣に座った。

座るとすぐに、使用人がやって来てお茶を入れてくれる。

「お茶をどうぞ。お菓子と果物も自由にお召し上がりください」

使用人は、未来の側にあるテーブルを指さした。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

砂漠の秘宝に魅せられて

《立読み版》

発行日 2012年3月30日

著者名 藤村 裕香

イラスト みささぎ 楓李

発行所 【MILK CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Hiroka Fujimura 2012

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。